

伝承遊び『お手玉』に関する考察

中山 冴子

(第一保育短期大学)

☆研究の目的

幼児のおもちゃ箱の中に入っている可愛い布で作ったお手玉。これはいつ頃、どこで、どのようにして、遊び道具になったのだろうか。お手玉のルーツを知りたい。

また保育学生はお手玉を作ったり遊んだりした経験があるか、その実態を把握したい。

そして本学の玩具・伝承遊び研究会（幼児教育研究会の一つ）でお手玉を作ってこれを保育に役立てたい。

☆お手玉について保育学生の実態

調査方法

1 調査対象 第一保育短期大学 二年の一部の学生

199名回収 回収率 95%

2 調査時期 平成4年9月～12月

3 調査方法 質問紙法

- 4 調査内容 (1) お手玉を作ったことの有無、
(2) お手玉を作った 時期
(3) お手玉の作り方の 指導者
(4) 作ったお手玉の種類
(5) お手玉遊びの経験の有無
(6) お手玉遊びの方法
(7) お手玉遊びの相手
(8) お手玉についての思い出

5 調査結果

お手玉を作った経験は約50%の学生がある。1表

その時期は小学校が約7割を占めている。2表

作り方の指導者は家族が約6割である。3表

種類は俵型66人、巴型17人である。4表

お手玉遊びの経験は97%がある。5表

遊び方は二つ玉交換が約80%である。6表

遊び相手は友達が約51%家族が43%。7表

お手玉についての思い出

・祖母や母とのかかわり

作り方や歌を習い楽しかった。

一緒に夢中になって遊んだ事が懐かしい。

両手にお手玉を5個持って上手に交換していた。

・友達や子どもとのかかわり等

この遊びで友達が増えた。皆で何回できるか競争した。

幼稚園の運動会の玉入れに使った。

実習園の先生が卒園児にこれをプレゼントしておられた。

川原にじゅうず玉を採りに行って、中に入れた。

幼児教育研究会でこの遊びの練習をしている。

コーラス研究会で公演の時に、これを使った。

オーストラリアでの研修の時お手玉を持って行ったら子どもたちが喜んだ。

園児がお手玉をままごと遊びに使っていた。

☆お手玉のルーツ

遠藤欣一郎 1)によると

1989年7月末から8月20日まで鳥取市で開催された鳥取市政百年記念『国際おもちゃ博覧会』に特別出品されたものの中に『アストラガロイ Astragaloi』が陳列されていた。これは『羊』の両足の学名で普通ナックルボーンズ Knucklebones (英語) と呼ばれ『距骨』と和訳されている。羊の足の骨は七つの骨の組み合わせで成り立ち、その一つが、距骨である。

ブリュエゲル (PieterBruegel) が描いた『子供の遊戯』には1560年当時の子供達の遊ぶ様子が描かれている。この絵には91の遊びが描かれ、お手玉遊び (Bikkelen) もその一つで二人の女の子がお手玉遊びをしている。遊んでいるお手玉はアストラガロイである。これは羊の距骨の脂を抜き乾燥させた六角形で大きさは約3～4cmほどである。

斎藤良輔 2)によると

お手玉遊びなど、ギリシャ神話でゼウスが楽しんでいるし、古代エジプトでもすでに子どもたちの遊び道具となっていた。セイロン島 (現スリランカ) でも名産のナツメ椰子の実を使ったお手玉式の遊びが古くからあったらしい。インド流のお手玉は中国を経て日本にもたらされた。

江戸時代の国語学者谷川士清の『和訓』に『法隆寺の宝物に、いしなどりの玉あり、小児の語に小石をいしなといふ』と記している『いしなどり』は『いしなご』といい、小石を地上に撒いて、その一つを空中に投げあげ、それが落ちてこぬ間に下の石をつかみ、早く拾い尽くしたのを勝ちとする。中国伝来の散楽の系統で、品玉、玉とりなどの名でよばれていた曲芸、手品の一種であった。江戸時代の女の子の遊びの前身である。

和久洋三 3)によると

お手玉が生まれたのは、江戸時代になってからである。それ以前は小石や貝がらなどで似た遊びをしていた。日本にはインド、中国を経て奈良時代からすでによく遊ばれており、ギリシャ神話にもオリンポスの神がこれに興じているところがある。ギリシャ人は羊の足でこれをつくり、ナックルボーンズとよんでいた。

以上1) 2) 3)の文献によると、お手玉はギリシャ神話では神が楽しんでいる。古代エジプトでも子どもたちの遊び道具になっている。その頃使われたのは、羊の距骨『アストラガロイAstragaloi』学名ナックルボーンズとよばれるものである。またセイロン島でナツメ椰子の実が利用された。インド流のお手玉が中国を経て日本に伝わった。『いしなご』といって小石で遊んでいたといわれる。日本で現在まで伝承されてきた小さな布袋に小豆などを入れて作ったお手玉は、江戸時代からと考えられ、わが国独特のものである。

☆お手玉を保育実践へ

(本学の玩具・伝承遊び研究会)

1、お手玉作成

・俵型・・・縦10cm横15cmの布を二つ折り
縦1cmのところを縫う。一方の端から1cmのところを縫いはじめ糸を3回巻いてしぼる。表に返し中に小豆か大豆を3分の2入れて上部1cmのところを縫いはじめ端布は中へ入れてしぼる。

・巴型・・・縦10cm横5cmの布2種類を2枚を巴に縫い合わせ、中に小豆などを入れる。

2、本学の保育フェスティバルでの実践

平成4年・5年の保育フェスティバルの時に手作り玩具の一部へお手玉コーナーを設け、ここで子どもたちとお手玉を作ったり遊んだりした。

3、本学附属M幼稚園での実践

平成6年1月に本学附属M幼稚園の誕生会に参加し全園児に作成したお手玉を配り遊んだ。このお手玉をクラスごとに袋に入れて渡し、自由に遊びに利用されるようにした。

☆結果および考察

保育学生はお手玉を作った事より遊びの経験が豊富である。祖母や母から衣服の残り布で作り方を習い、一緒に遊んだ楽しい思い出や、川原に数珠玉を採りに行って中に入れた体験もある。

また幼児教育研究会、保育・教育実習、海外研修などで、これを通して子どもたちと接した喜びを感じたものもある。

この研究会でのお手玉作成は俵型は作りやすいが、

巴型は、4枚の布の交差点がそろわず難しかったが、出来上がって操作すると手になじみやすかった。

また年少児が手で触れたり、把握したりして手先の運動に役立つようにと大きい物や長い物も作った。

お手玉のルーツ

お手玉の粗形は小石が多く、貝殻、金属片、木の実などが使われている。しかし興味深いのは羊の『距骨』である。これについて藤本浩之輔 4) シルクロードの子どもの遊び文化調査の時に安西の小学校訪問し子どもにゲームについて尋ねたところポケットの中から羊の骨が出てきたとの記録がある。ベルギー出身のピーター・ブリューゲルの『子どもの遊戯』(1560年)にはフランドル地方の当時の遊びを集めた中にも骨お手玉をしている子どもが描かれている。

日本の布のお手玉は江戸時代から伝承されている。遊び方は他国と共通している。このようにお手玉の粗形も遊びも世界各地に分布し長い歴史があり、共通性がある。古代から伝承されたこの人類の文化遺産に対し、畏敬の念をいだいた。

☆おわりに

昔から伝えられてきたお手玉を、学生が子どもたちと共に作り、わらべ歌に合わせて遊ぶことにより、心の触れ合いもできる。学生から子どもへ伝承させたい。

☆参考文献

- 1) 続・玩具の系譜 遠藤欣一郎著 日本玩具資料館発行
- 2) おもちゃ博物誌 斎藤良輔 著 騒人社発行
- 3) 童具 和久洋三 著 朝日新聞社発行
- 4) 教育者、研究者のための遊び、おもちゃに関する研究集1 奨励研究成果編 藤本浩之輔著 佐藤玩具文化財団発行
- 5) 伝承遊びお手玉に関する一考察 中山冴子 第一保育短大紀要 調査結果 (1993年)

1表	お手玉を作ったこと	ある 101	ない 98
2表	お手玉を作った時期	小学校 68 幼児期 7 短大 5	中学校 12 高等学校 5
3表	作り方の指導者	家族 63 友達 2	先生 19 その他 13
4表	作った種類	俵型 66 巴型 17	その他 3
5表	お手玉遊びの経験	ある 192	ない 6
6表	お手玉遊び方	二つ玉交換 184 その他 14	おさらい 34
7表	お手玉遊びの相手	友達 126 その他 16	家族 107

(単位 人数、回収 199人)